金子大榮先生を偲ぶ

略歴

明治十四年五月三日　新潟県高田に生れる
明治三十七年七月　真宗大学卒業
大正四年五月　東京に出て浩々洞の雑誌『精神界』を主筆（五年九月まで）
大正五年四月　東洋大学教授に就任
大正五年九月　真宗大谷大学教授に就任
大正十一年十月　曾我量深師と共に研究誌『見真』を発行
昭和三年六月　大谷大学教授を辞任
昭和五年四月　広島文理科大学講師に就任
昭和十七年三月　大谷大学教授に就任
昭和十八年十二月　真宗大谷派侍董寮出仕に任ぜられる
昭和十九年七月　真宗大谷派講師の学階を授与される
昭和二十四年六月　大谷大学教授を辞任
昭和二十六年十二月　大谷大学名誉教授に就任
昭和三十六年四月　真宗大谷派管長より多年一派教学に尽くした功労を賞せられる
昭和三十八年二月　「聞思院」と院号授与される
昭和三十八年五月　宗務顧問に就任
昭和四十二年十一月　勲三等瑞宝章を叙勲せられる
昭和五十一年十月二十日　逝去、法名　聞思院釈大榮

金子大榮先生の若き日を偲びて

松原祐善

昨年の十月二十日に本学名誉教授の金子大榮先生は満九十五歳の天寿を全うされてご往生なされた。一日おいて二十一日、同じく本学の名誉教授の山口益先生が八十一歳を以てあたかも金子先生と連れ立つようにして俄かにこの世を去ってゆかれた。本学にとりて一時に両先生を失うことになり悲しみの極みであった。両先生は本学の真宗学と仏教学の今日を築いて下された大恩人であり、大先覚であられた。ともに本学における伝統の学風を最も尊重され、最もそれを誇りとされておられた。かくしてお遺しになった両先生の偉大なる学問の業績に対し、本学に学ぶわれわれ後進のものは、これを受け継ぎこれにお応えしてその懇切なるご指導の恩に酬いられなくてはならないと思う。

私はここでしばらく金子大榮先生の若き日における学問研究のご苦労の跡をお偲びしたい。先生は明治十四年（一八八一）正月三日、新潟県上越市（もと中頸城郡高田町）最賢寺に誕生された。すでに五歳の春五月、東本願寺において得度をなされている。明治三十年（一八九七）郷里高田町の米南中学から京都の真宗中学四年に編入、明治三十二年（一八九九）七月真宗中学を卒業し、引き続き高倉学寮に併設されていた真宗大学の予科に入学された。時あたかも明治三十四年（一九〇一）十月は、まさしく今世紀の初頭にあたるのであるが、真宗大学は京都高倉の地より首都の東京に進出し、今日の豊島区巣鴨庚申塚周辺に移転改築され、初代の学監（学長）に清沢満之先生が迎えられ、近代日本の大学としての組織を整え、その志願として世界のなかの仏教の大学として新しく出発したのである。金子先生はこの年の九月に、この新しい真宗大学の本科一年生として入学したのである。先生二十一歳のときである。当時清沢満之は多田鼎、佐々木月樵、暁烏敏等の門弟らとともに東京の本郷・森川町の浩々洞にあり、明治三十四年一月より雑誌「精神界」を刊行して世の青年を導き、潑剌たる霊性的生命の息吹きをこの時代に覚醒してゆかれたのである。恐らく新入生の金子先生も明治三十四年十月十三日の真宗大学の開学記念の式典に出席して、清沢満之の有名な開学の辞を聴かれたに相違ないと思われる。しかし一ヶ年の後清沢満之は種々の不幸に見舞われ、宿痾の結核に倒れ、明治三十五年の十一月には学監職を辞して愛知県碧南市の自坊の病床に伏せられ、月々の「精神界」への論稿の筆だけをとられていた。そして翌明治三十六年（一九〇三）六月六日、遂に「我が信念」を絶筆として、四十一歳の短い生涯を閉じられたのである。真宗大学では先生のあとを受けて第二代の学長として、先生より十四歳の年上の南条文雄先生が就任されていた。

金子先生は真宗大学の本科では華厳科を専攻され、卒業論文として余乗では「華厳経大意」を、併せて宗乗の論文には「二種深信」を選ばれていた。そして真宗大学卒業後は直ちに越後高田の

自坊へ帰られ、全くご自坊を中心として布教と「精神界」への原稿執筆と、仏典の研鑽に専念されたのである。かくて以後十年間に及ぶ先生の在郷時代というものは、有斐会とか洗心会とか是真会という法を中心とする同友との交りもあって、先生の生涯には最も懐しい時代であり、そのなかから処女作の『真宗の教義と其の歴史』（無我山房）が生まれ、特に曾我量深師との深い信仰の交りがこの在郷時代にはじまるのである。偶々明治四十四年（一九一一）には、東京の真宗大学も十年を経過し、漸く伝統の学風も培われてきたところで、当時の本山当局によりて京都への移転を迫まられ、真宗大学の教職にあった曾我量深師等はこれに抗して大学を辞し、新潟県西蒲原郡の郷里へ帰られたのである。そのとき曾我先生は三十七歳であり、金子先生は三十一歳の頃である。先生は『真宗の教義と其の歴史』の序のはじめに「曾我先生を招請して、二年連続、数日間「七祖の系統」「大観二経の交際」を聴講したことが私に宗学の眼を与えた。この書もその指導に依れるものであった」と述べられている。またこの書の巻頭に曾我先生からの書簡がおかれているが、そこに「大兄よ我等は何の因縁か現に祖聖の配所、真宗の故郷に生れたり。浄土真宗は配所に生れたり、逆縁に生れたり。逆竹は逆縁興宗の表示也云々」と呼びかけられている。その書簡の日附が大正二年七月十日とある。そのことで想起されるのは曾我先生の「地上の救主—法蔵菩薩出現の意義—」の有名な論稿である。それは大正二年七月の「精神界」に載せられているのであるが、その劈頭に「私は昨年七月上旬、高田の金子君の所に於て「如来は我なり」の一句を感得し、次いで八月下旬、加賀の暁烏君の所に於て「如来我となりて我を救ひ給ふ」の一句を廻向していただいた。遂に十月頃「如来我となるとは法蔵菩薩降誕のことなり」と云ふことに気付かせてもらひました」ということが述べられている。金子先生の晩年にも「如来我となりて我を救ひたもう」というこの言葉がよく口にもれていたことが思出される。曾我先生も同じ越後の田舎にありてよき友、よき兄弟を得て相互に切嗟琢磨されたものと思われる。ちょうどその頃、暁烏敏師の「凋落」の告白、大正三年九月には多田鼎師の「動転」の表明、またそれに先立ちて大正元年に佐々木月樵師は京都に移設された真宗大谷大学の教授職に就かれていたのである。かくて東京の浩々洞は崩壊の危機に直面していたのである。そこで関根仁応師の斡旋により、大正四年（一九一五）の四月より金子先生の出郷を請うて「精神界」の編集責任者となって貰ったのである。先生、三十五歳のときである。雑誌には「謹告」として「従来浩々洞代表者暁烏敏兄及精神界編集責任多田鼎兄は此度一身上の都合により、其の地位を去られ、小生代りて之を担任することゝ相成候云々」の金子先生の一文が掲げられている。そしてその年の六月六日には清沢満之先生の十三回忌の法要を迎えたのである。またその頃近角常観師の求道会館が本郷・森川町に設立された。こうして金子先生を迎えて浩々洞は一時解散の危機を免れたのであったが、翌大正五年（一九一六）九月には金子先生はやむなく東京を離れて京都の真宗大谷大学の教授に就任されたので、再度曾我先生の東上を請うて、大正五年十月より曾我先生が洞の運営に当られることになった。

さて金子先生を迎えた大正五年当時の大谷大学は、東京の真宗大学以来の南条文雄先生を学長として、仏教学の教授陣としては住田智見、斉藤唯信、上杉文秀、河野法雲、豊満春洞、歴史学の山田文昭といった碩学が教壇に立っておられた。そのなかに浩々洞系では教授としては佐々木月樵師ひとりで、のちに山辺習学・赤沼智善の両師が参加されるのであるが、その間にありて新に迎えられた金子先生の使命には特に教学の現代化という大きな役割が負わされていたのである。先生が教授に就任されると、「華厳」の講義とともに、「仏教概論」の講義を新しく担当されねばならなかったのである。先生、三十六歳のときである。「私が大谷大学に奉職するや、直に仏教概論を講ずる事を命ぜられた。然るに当時第一に私の問題となったものは仏教概論とは云何なるものであるべきかという事である。既に概論という限り仏教の名の下に現われた総べての代表的思想を叙述せねばならぬであろう。されどそれは又単に形式を異にせる諸宗綱要を以て満足してはならぬ。是非とも与えられたる智見を以て仏教の根本精神を開顕し、それに根拠してあらゆる教学を批判し統一すべきである。この意味に於いて斯学の任務は重大であって、……早くより仏教の大地に生い立ちし私を励まし、これを果遂せんとの心願を起さしめた。かくして幾度も講義せる後、漸く斯著となったのである云々」と、その序のはじめに述べられてくるのであるが、この『仏教概論』の新著が紀平正美氏の紹介により東京の岩波書店より刊行されたのが大正八年（一九一九）の四月である。さきの序の言葉に続いて先生は「此概論で第一篇に於いて仏教概論の方法を考究し、第二編に於いては仏教の開顕せんとする真理の世界を辿り、第三篇に於いては其真理の実現としての菩薩道を説き、而して夫等の主題の下に全仏教を叙述せんと試みた。……古来真理の宗教と言われて居る仏教が、教界の専門家にのみ学究せらるる結果、動もすれば其普辺性を失わんとするは悲しむべきことである。仏教の宝庫は決して特殊の教徒の専有物でない。私は今この宝庫の一部を開いた。之に依りて私は斯著を縁として更により深く無尽の法蔵を探らんとする真菩薩の現われんことを、衷心から期待せざるを得ぬ」という切なる志願を以て世に贈られたのである。

その後先生は著述の執筆に精進され、年々にすぐれた著書が刊行されていった。大正十年七月「仏教の本質」（文栄堂）、大正十一年一月「宗教的理性」（中外出版社）、同年二月「真宗を崇信して」（法蔵館）、大正十二年二月「真宗学序説」（文献書院）、大正十四年六月「浄土の観念」（文栄堂）、同年同月「親鸞教の研究」（大村書店）、同年九月「彼岸の世界」（岩波書店）と世に問うてゆかれたのである。一方当時の大谷大学は大正十年（一九二一）三月、佐々木月樵師の招請と西田幾太郎氏のすすめに応えて、鈴木大拙先生が東京の学習院教授を離れて真宗大谷大学教授に就任なされた。当時鈴木大拙先生は五十一歳であった。先生により東方仏教徒協会が設立され、英文仏教誌「イースタンデイスト」が創刊されてきた。翌大正十一年五月には真宗大谷大学を大谷大学と改称し、大学令によって根本的に学制を改正。大正十二年（一九二三）十月、南条文雄先生は学長の職を退かれ、佐々木月

樵先生が学長事務取扱に就任され、大正十三年（一九二四）一月、佐々木先生が第三代の学長に就任。大正十四年（一九二五）四月「大谷大学樹立の精神」が発表されたのである。この年四月、曾我量深先生が大谷大学教授に就任。しかるに大正十五年（一九二六）三月六日、佐々木月樵学長は五十二歳を以て中途にして逝去された。其業を半ばにして佐々木先生を失ったことは本学にとりては痛恨の至りであった。

偶々昭和三年（一九二八）六月のことである。金子先生は大谷大学教授の職を離れ、真宗大谷派の僧籍をも褫奪されるという先生の生涯における最大の悲痛事に出逢われたのである。先生における僧籍はご尊父に伴われて五歳のとき東本願寺に於て厳如上人から得度をうけられたのである。この得度は先生の人生と共に始まったというて過言でなく、まことに宗門というものはわれわれには善悪を超えて不可思議の業縁と受けとる外はない。こうした僧籍が横さまに権力によりて奪われるということは、自覚せる個人には堕獄の痛みを覚ゆるのである。問題はこうである。大正十四年（一九二五）六月に出版された『浄土の観念』（文栄堂）について、教団側は学問としてその真理を究明することなしに、敢えて異安心の書としてこれを葬ったのである。これは日本仏教法話会における講演をまとめたもので、大乗経典における浄土の究明である。この著書は「浄土の観念」と題されているが、本書の内容は第一を「自覚に現わるる浄土」第二を「大乗経に於ける浄土の観念」としている。そして第二の内容を更に五項に分ち、第一項「観念界として（の浄土）」、第二項「実現の理想として（の浄土）」、第三項「願生すべき実在界として（の浄土）」、第四項「観念と実在」、第五「実現か願生か」としている。恐らく第一を前提として、第二の五項のなかに、実在としての浄土が中心課題となっているのである。思うに本書は科学的な合理主義に偏重している現代の日本の青年に対し、実在の浄土を如何にして領解せしむべきであるか、大乗経典に説かれる浄土の説がわれわれの人生にとって如何なる意味をもつものかを懇切を尽して解明されている。私は今日でも本書が現代人の浄土を否定し無視する常識に対して、教法による浄土の実在観念を宣揚しようとするすぐれたる啓蒙の書であると思うている。いま私が啓蒙ということは決して本書の価値を低めるということではない。本書の行き届いた親切を表明したいのである。浄土の問題はもとよりわれわれの生命の問題である。それだけに本書のごとき自らの生命を賭し、学問として、勇気を以て浄土の実在の本義を問えるものは恐らく稀れであろう。ただ本書では観念という哲学的な概念が宗門の伝統派の人々には馴染めない用語として、却ってその用語を聖道的な自性唯心に泥む観念の浄土と誤り、更らには指方立相の浄土を否定するものと誤解したのである。先生は夙にドイツ哲学の木場了本氏との親密な交友もあり、ギリシヤのプラトンやドイツのカント哲学に対する教養を身につけておられることもあって、いまは哲学的に厳密な用語を使用して、教法の説く浄土の実在は単なる常識的な素朴的実在でなくて、次元を異にした観念的実在であることを強調されたのである。思うに真理は万人のものでなくてはならない。親鸞聖人においては浄土真宗は宗教として大乗仏教の

至極のものであると仰がれておられるのであって、少くとも本学における仏教学・真宗学の使命は、浄土真宗の教法が教界における特殊の教徒をのみ対象とするものではなく、これを学として究めてこれを世界の万人に解放されなくてはならないのである。佐々木月樵先生が一代の心血を注いで綴られた「大谷大学樹立の精神」に見られる大谷大学の特質であり、本領たる仏教学・真宗学は、仏教が万人の仏教であり宗教である限り仏教学・真宗学も万人の仏教学・真宗学でなくてはならぬと述べられている。この学としての深い人類的な志願に対して、文字通り金子先生はひとり身を以て応答されてゆかれたのであり、そのお人柄は至って柔軟であられるのであるが、内には厳しい妥協のない強靱なる魂を秘められておられたことが今更ら偲ばれるのである。

昭和五年（一九三〇）四月、先生は広島文理科大学長の吉田賢龍氏の招きをうけて、専任講師として仏教哲学史を講ぜられることになった。先生五十歳のときである。しかしなお京都にとどまり、昭和八年（一九三三）四月広島に移住されるまで京都の鹿ヶ谷に興法学園を開設して、先に大谷大学に残されてきた学生のために勉学の場所を与えられたのである。この学園の命名は曾我先生であるが、曾我先生も昭和五年三月には宗門の異解者として大谷大学の教職を追放されることになり、ここに金子先生の発起によって興法学園が生れ、ここで曾我・金子両先生の講義や講話が一般に公開されてきたのである。金子先生の広島文理科時代は昭和八年（一九三三）より昭和十七年（一九四二）三月、大谷大学教授に復帰されるまでに及ぶ約十年間である。既に僧籍からも離れ、宗門とか教団という枠を超えて、自由の身となって日本の国民大衆の一人として真宗の教法を仰いでゆかれたのである。「親鸞聖人はその代表する一切衆生のものであり、日本人のものであって、特に真宗諸派のものではない。随って真宗の教法はいやしくも宗教的要求あるものには何人にも領解し得られるものであって、特に教団に属する人々にのみ理解し得られるようなものではない」というのが追放当時の先生の確信であった。広島時代には昭和九年（一九三四）九月『仏教の諸問題』（岩波書店）が刊行された。これは広島文理科大学における五ヶ年の講案をまとめたものであり、旧著『仏教概論』の補正の意味をもつものといわれる。昭和十五年（一九四〇）四月『日本仏教史観』（岩波書店）が出版されてきた。そしてその間において先生の主著ともいわるべき『教行信証講読』三巻の刊行が完了しているのである。実は私は先生の講義は興法学園においてはじめて接することができ、著書としては『日本仏教史観』が思い出深い。以上は先生の若き日のご苦労の跡をお偲びして、所感の一端を述べた次第である。（私はこの執筆と同時に真宗学研究室の『親鸞教学』からも金子先生に対する追憶文を要求された。そこではその後の金子先生の業績から筆を起しているので、できれば参照されたい。）

金子大榮師著書目録

讃仰録　東京　無我山房　明治四四・一
真宗の教義及其歴史　東京　無我山房　大正四・二
親鸞聖人の宗教　東京　無我山房　大正五・六
佛教概論（選集一）（著作集一）　東京　岩波書店　大正八・六
佛教の本質（著作集二）　京都　文榮堂　大正十・六
真宗を敬信して　京都　法藏館　大正一一・二
宗教的理性（著作集二）　京都　丁子屋書店　大正一一・十
真宗學序説　京都　文献書院　大正一二・一
浄土の觀念　京都　文榮堂　大正一四・二
親鸞教の研究（選集四）（著作集三）　東京　大村書店　大正一四・六
彼岸の世界（選集四）（著作集三）　東京　岩波書店　大正一四・九
如来及び浄土の觀念　京都　真宗研究所　昭和二・五
華嚴十地品講義（昭和二年安居）　京都　安居事務所　昭和二・七
教行信證の概要　東京　岩波書店　昭和二・八
大乘佛教の中心思想　京都　東方書院　昭和四・一
教行信證に現はるゝ「父」と「子」　京都　文榮堂　昭和四・一
大無量壽經の概要　京都　文榮堂　昭和五・六
本願之宗教　東京　佛教真和會　昭和五・八
宗教経驗に就きて（鈴木大拙・金子大榮講述）　福井　武生自道社　昭和五・一二
歸依と行善（選集十一）　東京　崩文社　昭和六・二
岩波文庫 歎異抄　東京　岩波書店　昭和六・六
信珠院順芸師 宗典研究　京都　興法學園　昭和七・一
教行信證の概要（後編）　讃仰會　昭和七・八
調和の饗宴—現の世界と夢の領域—（佐々木月樵先生追悼記念講演集）　京都　一生堂書店　昭和八・三
華嚴經　東京　東方書院　昭和九・三
歎異抄講話（前編）　東京　崩文社　昭和九・七
佛教の諸問題（選集二）（著作集四）　東京　岩波書店　昭和九・九
觀無量壽經・阿彌陀經概要　讃仰會　昭和十・二
篤敬三寶の聖旨—日本佛教の精神—（思想問題小輯7）　東京　文部省　昭和十・二
歸三寶の精神　東京　日本文化協會　昭和十・三
人生のゆくへ（選集一一）　名古屋　信道會館　昭和十・六
日本佛教の精神　東京　日本文化協會　昭和一〇・七
国家理想としての四十八願　東京　日本文化協會　昭和一〇・九
歎異抄講話（後編）　東京　崩文社　昭和一〇・一一
大無量壽經講話（上巻）（選集一七）　東京　金子大榮師講演集刊行會　昭和一〇・一一

觀經・阿彌陀經の概要　京都　文榮堂　昭和一一・一
大無量壽經講話（下巻）（選集一八）　東京　金子大榮師講演集刊行會　昭和一一・五
本願の宗教　名古屋　信道會館　昭和一一・九
觀無量壽經講話（選集一九）　東京　金子大榮師著作刊行會　昭和一二・三
歎異抄講話　同信會　昭和一一・四
佛心　東京　金子大榮師著作刊行會　昭和一二・五
阿彌陀經講話（選集二〇）　東京　金子大榮師著作刊行會　昭和一二・一一
二河譬　名古屋　信道會館　昭和一三・六
教行信證講讀（教行の巻）（選集六）（著作集六）　横浜　金子大榮師著作刊行會　昭和一三・一二
宗教の領域　東京　日本文化協會　昭和一四・四
正信偈講話（選集二〇）　横浜　金子大榮師著作刊行會　昭和一四・六
萬善同歸　愛知　塩津村佛教會　昭和一四・六
歎異抄　長野　諏訪教育委員會湖北職員會　昭和一四・六
親鸞上人に映ぜる聖德太子　東京　目黒書店　昭和一四・一一
宗教的人格　名古屋　信道會館　昭和一五・三
日本佛教史觀（選集三）（著作集五）　東京　岩波書店　昭和一五・四
浄土論の概要　讃仰會　昭和一五・五
正像末和讃講話（正編）　横浜　金子大榮師著作刊行會　昭和一五・五
傳教・弘法と日本文化　東京　内閣印刷局　昭和一五・七
三經義疏と日本佛教　東京　内閣印刷局　昭和一五・九
群萌の宗教　京都　同朋舎　昭和一五・九
月愛三昧　名古屋　信道會館　昭和一五・九
日本佛教の諸問題―金鼓の音―（山辺習学、羽渓了諦、金子大榮述）　京都　丁子屋書店　昭和一五・九
教行信證講讀（信證の巻）（選集七）（著作集七）　横浜　金子大榮師著作刊會　昭和一五・一二
和の世界　愛知　塩津村佛教會　昭和一五・一二
真宗の教義と其の歴史（教義篇）　京都　丁子屋書店　昭和一六・一
日本佛教思想概觀（國民精神文化文献23　日本佛教思想資料）　東京　國民精神文化研究所　昭和一六・三
教行信證講讀（真化の巻）（選集八）（著作集八）　横浜　金子大榮師著作刊行會　昭和一六・五
精進―ある人の問に答へて―（日本勤労双書5）　東京　目黒書店　昭和一六・九
和の世界觀　横浜　金子大榮師著作刊行會　昭和一六・一二
人（選集一三）　京都　同朋舎　昭和一七・四
正法の開顕　京都　大谷出版協會　昭和一七・七
真宗教義に於ける法の概念　京都　大谷派教化研究院　昭和一七・一一
人生に於ける宗教の領域　東京　佛光寺東京別院　昭和一七・一一

真宗の教義と其の歴史（歴史編）　京都　丁子屋書店　昭和一七・一二
雑想觀（静寂）（選集九）　横浜　金子大榮師著作刊行會　昭和一七・一二
新講日本佛教概論（他七氏）京都　一生堂書店　昭和一七・一二
浄邦の縁・浄業の機　愛知　都築勲　昭和一八・二
皇國と佛教　京都　大谷出版協會　昭和一八・二
十七条憲法について　愛知　信光寺　昭和一八・三
佛心（点字版）　京都　大谷出版協會　昭和一八・一〇
弟子の智慧（選集一二）　京都　全人社　昭和一八・一一
佛（選集一三）　京都　全人社　昭和一九・三
拾二抄　京都　全人社　昭和一九・七
教行信證講讀（證巻）　京都　全人社　昭和一九・八
正像末和讃聞思録（昭和二十年安居）　京都　安居事務所　昭和二〇・七
教行信證講讀（真仏土巻）　京都　東光書林　昭和二一・三
雑華録（選集一二）　東京　創元社　昭和二一・一〇
浄土教縁起（選集一四）　京都　全人社　昭和二一・一一
歎異抄講話（上）　京都　全人社　昭和二二・四
宗教的覺醒（選集一〇）　京都　全人社　昭和二二・五
佛道史觀　京都　大谷教學研究所　昭和二二・五
歎異抄講話（下）　京都　全人社　昭和二二・七
月愛三昧　京都　全人社　昭和二二・八
自然　京都　全人社　昭和二二・一一
佛教概論（改訂版）　京都　全人社　昭和二二・一二
阿彌陀經講話　京都　全人社　昭和二三・一
彼岸の世界　京都　全人社　昭和二三・四
華嚴經概説　京都　全人社　昭和二三・五
直枉の宗教（選集一二）　京都　全人社　昭和二三・六
私の人生觀（選集一〇）　京都　全人社　昭和二三・八
歎異抄聞思録（上巻）（選集一五）　京都　全人社　昭和二三・一〇
無盡燈　京都　全人社　昭和二四・三
真実（蓮如上人四百五十回遠忌記念双書）　京都　大谷派宗務所　昭和二四・四
浄土和讃講話（上巻）　京都　全人社　昭和二四・四
歎異抄領解（意譯歎異抄）（選集一五）　京都　全人社　昭和二四・四
意譯歎異抄　京都　全人社　昭和二四・四
生死（雑誌天地五月号）　札幌　重永潛　昭和二四・五
永遠と死（選集一〇）　京都　全人社　昭和二四・八
歎異抄聞思録（中巻）（選集一六）　京都　全人社　昭和二四・一〇
正信偈講讀　京都　全人社　昭和二四・一二
浄土の機を求めて　京都　大谷派宗務所　昭和二五・一
意譯正信偈　京都　全人社　昭和二五・六
真宗の話（選集一四）　京都　全人社　昭和二五・七
歎異抄聞思録（下巻）（選集一六）京都　全人社　昭和二五・九

宗教入門（選集一〇）　京都　全人社　昭和二五・一〇
末の世のともしび　京都　全人社　昭和二五・一〇
他力本願（選集一四）　京都　全人社　昭和二五・一一
（プリント）聞思の教學　滋賀　湖北大谷學場　昭和二五
因縁ということ　京都　全人社　昭和二六・一
ひかりの国　京都　全人社　昭和二六・一
意譯教行信證　京都　全人社　昭和二六・五
意譯聖典　京都　全人社　昭和二六・九
人生航路　京都　全人社　昭和二七・一
人生における宗教の領域　鹿野苑　昭和二七・三
真宗の倫理　京都　大谷派宗務所　昭和二七・三
仏教の話　京都　全人社　昭和二七・三
大無量壽經聞思録（昭和二七年安居）　京都　安居事務所　昭和二七・七
住職道　京都　大谷派宗務所　昭和二八・二
教行信證の概要　京都　全人社　昭和二八・七
解けゆく心　京都　永田文昌堂　昭和三〇・二
念仏について　京都　全人社　昭和三〇・五
法縁のよろこび—教行信證について—　京都　あそか書林　昭和三〇・五
如来の本願と人間の理想　東京　在家佛教協會　昭和三〇・八
教行信證の研究（著作集九）　東京　岩波書店　昭和三一・一
真宗の要旨　京都　大谷派宗務所　昭和三一・六
真宗を敬信して—金子大榮師の講話—　金沢　金沢教区第六組　昭和三一・一〇
道場としての人生　京都　西村為法館　昭和三一・一〇
遇法の因縁　京都　西村為法館　昭和三二・七
岩波文庫教行信證　東京　岩波書店　昭和三二・一〇
佛教の人間観　東京　在家佛教協會　昭和三二・一一
無碍の光　札幌　大谷布教団　昭和三三・一
大涅槃　京都　あそか書林　昭和三三・三
尊號真像銘文講話（上巻）　京都　あそか書林　昭和三三・一一
本願とその成就　七尾　七尾教務所　昭和三四・二
尊號真像銘文講話（下巻）　京都　あそか書林　昭和三四・五
親鸞聖人は現代人に何を教示しつつあるか　東京　佛光寺別院　昭和三五・三
真宗の要義（選集五）　東京　在家佛教協會　昭和三五・六
教行信證の諸問題（選集五）（著作集九）　東京　在家佛教協會　昭和三五・六
法味寸言集　西尾　無量壽寺　昭和三五・七
人開の真実のあり方（道標双書）　仏教教材研究社　昭和三五・八
仏教統一への期待　京都　大谷出版社　昭和三五・八
真宗の現世利益　京都　大谷出版社　昭和三五・一〇
顕浄土真実教文類講録（昭和三六年安居）　京都　安居事務所　昭和三六・七
口語訳教行信證付領解　京都　法蔵館　昭和三六・七
論文集（佛教編）（選集続一）　東京　在家佛教協會　昭和三

六・九
正信偈新講（上巻）　京都　あそか書林　昭和三六・一〇
念仏と人生　東京　在家佛教協會　昭和三七・一
現世利益和讃講話　京都　大谷出版社　昭和三七・四
論文集（真宗編）（選集続二）　東京　在家佛教協會　昭和三七・四
正信偈新講（中巻）　京都　あそか書林　昭和三七・七
人間の苦悩とその救い（聞思文集）　京都　百華苑　昭和三七・八
正信偈新講（下巻）　京都　あそか書林　昭和三七・一一
現生不退（現代しんらん講座3）　東京　普通社　昭和三八・八
論文集（歴史編・宗体編）（選集続三）　東京　在家佛教協會　昭和三八・九
浄土三部経と浄土論の概要　京都　文栄堂　昭和三八・一二
教団のあり方について　東京　関東大谷学場　昭和三九・二
念仏者の智慧　東京　教育新潮社　昭和三九・二
教行信証総説（著作集一〇）　京都　百華苑　昭和三九・四
真実の教　大阪　難波別院　昭和三九・五
浄土の教　大阪　難波別院　昭和三九・五
親鸞聖人に於ける問と答　西尾　無量壽寺　昭和三九・五
意譯正信偈　京都　全人社　昭和三九・七
親鸞の世界（鈴木大拙、曾我量深、金子大榮、西谷啓治）　京都　東本願寺出版部　昭和三九・七
親鸞著作全集　京都　法蔵館　昭和三九・一一
往生極楽の道　京都　百華苑　昭和四〇・一
大榮先生の宗教教室　東京　浅草本願寺　昭和四〇・四
現生十種の益　東京　彌生書房　昭和四〇・六
宿業について　金沢　金沢教区第六組　昭和四〇・一〇
真宗の教義とその歴史　京都　百華苑　昭和四〇・一〇
現代人の古典歎異抄　東京　コマ文庫　昭和四〇・一一
親鸞聖人を憶う（金子大榮、藤島達朗述）　京都　文栄堂　昭和四一・四
真宗の現世利益—現世利益和讃講話—　京都　大谷出版社　昭和四一・四
真宗学序説　京都　文栄堂　昭和四一・六
親鸞の人生観　京都　法蔵館　昭和四一・六
大信海　東京　彌生書房　昭和四一・一〇
現代人の信仰問答（同朋双書11）　京都　東本願寺出版部　昭和四一・一〇
人生を語る　東京　コマ文庫　昭和四二・八
人生観としての真宗　金沢　金沢教区第六組　昭和四二・一〇
浄土の諸問題　京都　あそか書林　昭和四三・四
晩学聞思録　東京　在家佛教協會　昭和四三・五
普遍の法・特殊の機　京都　金子大栄先生米寿記念会　昭和四三・八
法縁　京都　文栄堂　昭和四三・一〇
三経和讃講話　東京　彌生書房　昭和四四・五

歎異抄―仏教の人生観―　京都　明光寺　昭和四四・五
人生に於ける問と答　八尾　光蓮寺聞思会　昭和四五・一
親鸞と共に生きる（あなたの宗教教室）　東京　読売新聞社
昭和四五・五
讃阿弥陀佛偈和讃講義（昭和四五年安居）　京都　東本願寺出版部　昭和四五・七
聖徳太子と親鸞聖人　大阪　聖徳太子会　昭和四六・一
経説の妙好人（金子大榮講話集1）　京都　法蔵館　昭和四六・六
親鸞の世界　東京　徳間書店　昭和四七・二
人間について　京都　雄渾社　昭和四七・四
親鸞の世界（続）　東京　徳間書店　昭和四七・七
讃阿彌陀佛偈和讃聴記　京都　東本願寺出版部　昭和四七・七
金子大榮随想集全十巻　京都　雄渾社　昭和四七・八～一〇
仏教のこころ（「無盡燈」改題）　東京　潮文社　昭和四八・一
念仏のこころ（金子大榮講話集2）　京都　法蔵館　昭和四八・四
和讃日日（正）　大阪　東本願寺難波別院　昭和四八・一〇
聞思室日記（正）　東京　コマ文庫　昭和五〇・七
聞思室日記（続）　東京　コマ文庫　昭和五〇・一〇
法話六十年（金子大榮講話集3）　京都　法蔵館　昭和五一・六
大いなる信心（金子大榮講話集4）　京都　法蔵館　昭和五一・六
聞思室日記（続々）　東京　コマ文庫　昭和五一・一〇
和讃日日（続）　大阪　東本願寺難波別院　昭和五一・一〇
高僧和讃講話（上）　東京　彌生書房　昭和五一・一一
清沢先生の世界―清沢満之の思想と信念について―　京都　文明堂　昭和五二・二
十二の光（金子大榮講話集5）　京都　法蔵館　昭和五二・二
高僧和讃講話（下）　東京　彌生書房　昭和五二・三
金子大榮著作集全十二巻　東京　春秋社　昭和五二・四～
※金子大榮選集（昭和三〇―三八　在家佛教協會刊）所収のものは、選集として示した。
※金子大榮著作集（昭和五二―春秋社刊）所収のものは、著作集として示した。
※一部に金子大榮先生宅所蔵の著作目録を参照させていただいた。